

#子育て処方せん

体内異常鮮明に撮影

福岡市立こども病院の医師が子どもの病気や検査法などについて解説する「#子育て処方せん」。今回は、体内の異常を画像などで確認する「CT・MRI検査」について、放射線科長の伊東絵美医師に聞いた。

CT・MRI検査

体の中の状況を画像にして診断する方法は様々あり、最も使われるのは単純X線検査だ。使用される放射線の量はわずかで体への影響は小さく、安全に検査ができる。その反面、他の検査と比べると画質はそれほど良くない。X線写真で十分診断できる病気もあるが、異常の有無や大まかな部位を見つけるためのスクリーニング(選別検査)に用いられることが多い。

超音波検査もよく使われる。子どもの体は大人より小さく、超音波が届きやすいため、鮮明に体内の様子を観察できる。ただし、検査を行う人の技量や患者の動きなどが結果に影響することがある。

コンピュータ断層撮影法(CT)と磁気共鳴画像(MRI)は、より鮮明な画像を撮影できるが、それぞれ注意すべき点がある。

CTは一定量のX線を使

うことへの配慮が必要だ。一般的に子どもの体は大人より放射線による影響を受けやすいとされる。最近の機器は少ない放射線量で高い画質を維持できるよう改良されている。それでも、使う場面や部位

MRIは磁場と電波を用いて画像を得るため、放射線被曝の心配はない。ただ、撮影時の音が大きく、時間もCTよりかかるため、検査中に幼児が安静を保つことは難しい。鎮静剤



伊東絵美医師

放射線量、機器の音に配慮

で眠らせて撮影することもあるが、呼吸の管理などに十分な配慮を行っている。

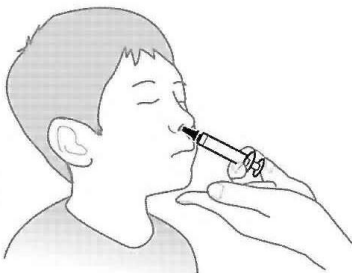
当院では、できる限り鎮静剤を使わずにリラックスして検査を受けてもらうための工夫を凝らしている。ドーナツ形の機器や検査室の壁をかわいいイラストで飾っているほか、検査中にヘッドホンで好みの音楽を流したり、経験豊富な技師が明るく声をかけたりする。

MRI検査を被験者目線で疑似体験できる動画などもある。事前に親子で視聴してもらい、怖い検査ではないことを知ってもらっている。

(聞き手・大森祐輔)

経鼻ワクチン接種 助成する自治体も

1回で済む/針使わない



経鼻インフルエンザワクチンの接種イメージ

今年早くもインフルエンザの流行期に入った。発症や重症化のリスクを下げる効果があるとして、医療機関などが推奨するワクチン接種を巡っては、2〜18歳向けに鼻腔に噴射する「経鼻ワクチン」が昨年登場。接種費用を助成する自治体も出ています。

田代克弥副院長は経鼻ワクチンについて「接種が1回で済むので保護者の利便性もよく、特に小さい子に注射の怖さがないのはいい。接種者が増え、インフルエンザの流行や重症化を防ぐ一助になると期待できる」と評価する。

注射型に加え、経鼻ワクチンの接種費用の助成を始める自治体もある。2〜15歳に対して佐賀県唐津市が1000円、福岡県うきは市は3000円を助成。長崎市や大分県国東市なども同様の対応を取っている。

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール(s-syaka1@yomiuri.com)へお願いします。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください